

## 異分野との融合

静岡大学 学長

Yukihiro Itou  
President  
Shizuoka University

伊東 幸宏



「自然言語処理」という学問領域があります。人間が自由にことばを操るようにコンピュータに言語を理解したり、生成したりする能力を持たせることを目指すのです。私は、大学の卒業研究でこの分野に出会い、以来、この分野にテーマを定めて研究を続けてきました。

その間、多くの異分野の方々と出会い、影響を受けてきました。私自身は情報工学、コンピュータ・サイエンスをベースとする工学畑の人間ですが、「ことば」を研究対象とするため、言語学の知識を求め、多くの言語学者と知り合いました。また、人間が言葉を理解するという認知プロセスを心理学的な立場で探究している認知科学者とも盛んに議論しました。それらの言語学者、認知科学者の中には、喧嘩別れしたままのような人もいますが、共同で研究を進めて共著の論文を仕上げるに至った人もいます。いずれにせよ、ことばに関心を持ち、それぞれの立場からことばに関する問題について考えてきた人たちとの出会いが、自分自身の地平を広げ、高い次元から物事を考えるきっかけを与えてくれました。仲間内で常識として当然のように前提としていた事柄が異分野の人には奇異な盲信に写り、改めて突き詰めて議論してみると、ある条件のもとでのみ正しいが、別の条件下では修正が必要であることが分かるなど、いわゆる「目から鱗」のような経験を何度か味わいました。

しかしながら、異分野の人々と徹底的に議論することは、そうたやすいことではありません。最初はお互い何を言っているのかさっぱり分からないのです。同じ単語でも実は分野のスラング的な要素があって意味合いが異なっており、でも、そのことに気づかずにその単語を使って議論していたため、何度やりあってもすれ違いのままということもありました。また、すれ違いの議論の中での何気ない一言が相手のプライ

ドを傷つけてしまうことも起こりがちです。時間をかけて丁寧に、互いに尊敬の念をもって、論点を紐解いてゆく覚悟が必要です。

それでも異分野と融合して次元を高めてゆくことが、21世紀の複雑な問題を解決してゆくためには不可欠だと思っています。今、人類に突きつけられている問題の多くは、狭い領域の専門家だけが集まって知恵を絞っても、解決できるものではないのではないのでしょうか。また、単に複数分野の人間を集めるだけでも駄目です。集まった人間が、プロ意識をもちつつ、時に自分の常識をも疑ってかかる謙虚さと、互いの考えを徹底的にロジカルに伝えあうコミュニケーション能力をもち、目的を共有して事に当たることが重要です。

私は、このようなチームの中で活躍できる人材が育つような環境を大学に作りたいと考えています。それができる大学が、真のUniversityであると思います。そのためには、自分の軸となる領域に関してプロフェッショナルを自認できる位の知識とメタ知識を習得できる教育プログラムを提供するとともに、学科、学部の壁を取り払って、自分の専攻と異なる分野の多くの学生や教員と深い議論を行えるような教育システムが必要となります。そのような教育を提供できるような大学でありたいと願っています。

大学がそのような機能を有し、また、21世紀の問題解決に挑む専門家が上述のような能力をもつことが望まれているのであれば、大学は単に社会に出る前の学生のための学びの場だけでなく、社会人にとって、自分の専門を深めるとともに、自由に異分野と触れあって自分の次元を高めるような学びの場として機能するはずで、そんな大学と社会との関係も築き上げてゆきたいものです。